



児童図書研究室だより

平成 24 年 12 月 5 日 発行

Vol.11

グリム童話発行200周年

今日、『グリム童話』は世界で最もよく読まれている本の一つです。『白雪姫』や『赤ずきん』、『ラプンツェル』などは特に知られた物語です。今年は初版が発行されて200周年にあたります。そこで今回はグリム童話にスポットを当てて、グリム兄弟とその功績を紹介していきます。

○グリム童話

正式には『子どもと家庭のためのメルヒェン集』。1812年のクリスマスにその初版第一巻が発行され、兄弟が存命中には第七版まで改訂がされています。その度に、新たに収集された昔話が増えられたり、削除されたりして、第七版では200編が収められたメルヒェン集になります。加えられた改訂とその意義については、『グリム童話の誕生』で詳しく述べられています。一方で、グリム童話は、その物語中にある残虐性がしばしば注目されることです。このことは、初版発行当時から批判の対象となっていました。この点について『グリム童話 子どもに聞かせてよいか?』など、多くの資料で検証されています。なお、グリム兄弟が収集したこのメルヒェン集は、後世の学者たちの手によって1961年に全32巻として完結しています。

○メルヒェン集以外のグリム兄弟

第二版序文によると、兄弟は1806年ごろから昔話の収集を始めたこと記されています。それから約6年をかけての発行となりますが、これ以外にもグリム兄弟は多くの功績を残しています。例えば、兄ヤーコプは『ドイツ文法』を著し、子音の推移に

ついて、「グリムの法則」と言われる法則性について述べています。一方、弟ヴィルヘルムも『ドイツ英雄伝説集』などを著しています。

こういったグリム兄弟の幅広い活動については、『グリム兄弟 生涯・作品・時代』の中で多くの図版と共に解説されているのをはじめ、『グリム兄弟とその時代』などの資料で知ることができます。また、1805年から1815年の間に兄弟が交わした書簡は『グリム兄弟自伝往復書簡集』および『グリム兄弟往復書簡集』で読むことができます。

○日本におけるグリム童話

今日の研究によると、最初に日本で紹介されたグリム童話は、府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』(第9巻第4号)によると明治期に英語教材から取り入れたのが最初とされています。その後の変遷については、『日本における外国昔話の受容と変容』等で詳しく研究されています。

また、『グリム童話』の各版は、次の本などで読むことができます。

- ・草稿 『初版以前グリム・メルヒェン集』(フローチャー美和子訳,東洋書林,2001年)
- ・初版 『初版グリム童話集』全4巻(吉原高志・吉原素子訳,白水社,1997年)
- ・第二版 『完訳グリム童話集』全2

巻(小澤俊夫訳,ぎょうせい,1985年)

・第七版『決定版完訳グリム童話集』全7巻(野村滋訳,筑摩書房,1999年)

現在、国内で出版されているグリム童話の多くは第七版を底本としています。

○児童図書研究室展示

児童図書研究室では、2012年11月19日から2013年1月20日まで、県立図書館が所蔵する様々なグリム童話を紹介しています。様々な点でグリム童話について知識を深めたり比較したりできる資料を並べています。ぜひこの機会にグリム童話を改めてご覧ください。

(引用文献)

- ・小澤俊夫著『グリム童話の誕生』(朝日新聞社,1992)
- ・野村滋著『グリム童話 子どもに聞かせてよいか?』(筑摩書房,1989)
- ・ガブリエーレ・ザイツ著,高木昌史訳,高木万里子訳『グリム兄弟 生涯・作品・時代』(青土社,1999)
- ・橋本孝著『グリム兄弟とその時代』(パロル舎,2000)
- ・山田好司訳『グリム兄弟自伝往復書簡集』『グリム兄弟往復書簡集』(本の風景社,2002)
- ・府川源一郎「アンデルセン童話とグリム童話の本邦初訳をめぐって」『文学』(第9巻第4号)
- ・久保華著『日本における外国昔話の受容と変容』(三弥井書店,2009)

新着図書紹介

児童図書研究書紹介



『ひと目でわかるブックトーク』

越高一夫／監修 NPO 読書サポート 2012年 019.2/シ12

「ブックトークをしてみたいけれど、どんなふうにしてよいか分からない。」という人も多いのではないのでしょうか。この本では、「キーワードを決めて」「1冊の本を中心に」「連想ゲームのように」と3つの選書の方法、ならびに実践例を紹介しています。また、「小学校高学年向け」と「中学生・高校生向け」に分けて紹介しており、子どもの実態に応じて取り入れることができます。本の紹介はあらずじとともにも本の表紙をカラーで、プログラムをイメージしやすくなっています。そして、台本つきの実例が載せてあるので、紹介する本をどのような言葉で次々とつなげていくかが分かります。

『マイノリティは苦しみをのりこえて』

吉田純子、鈴木宏枝、大喜多香枝／著 冬弓舎 2012年 909.3/シ12

ティーンエイジャーの主人公が思春期特有の問題に直面して苦悩し、それを乗り越えていくさまを描いたYA文学作品のなかでも、特に「ハイフン付のアメリカ人」つまり「アメリカ以外にルーツを持つアメリカ人」を取り上げています。日系人の少女を描いたシンシア・カドハタの『七つの月』や、黒人親子の3世代にわたる心の傷を扱ったアンジェラ・ジョンソンの『^{すき}犁を打ち鳴らす』、そして白人でも貧農出身の少女が苦難と戦いながら成長する物語を描いたキャサリン・パターソンの『ワーキング・ガール』などが収められています。これらの作品を、R. S. トライツの『宇宙をかきみだす』とホミ・バーバの『文化の場所』の理論を用いて読み解いていきます。主人公の背景にある文化、習俗、宗教というマイノリティの要素が、昇華されていく過程は、誰でもマイノリティになる可能性があるこの社会で、我々に力を与えてくれます。



新着児童図書紹介



『教育者という生き方』 三井綾子／著 ペリかん社 2012年 C372/ミ

この本は「発見！しごと偉人伝シリーズ」の第3弾です。ペスタロッチ、フレーベル、福沢諭吉、宮沢賢治など10名の偉人が紹介されています。イントロダクションでは主な偉業を紹介し、本文では、生い立ちから亡くなるまでをその人物について簡単に分かりやすく説明してあります。伝記や教育に関する問い合わせだけでなく、将来、先生を目指している方や、もうすでに先生として働いている方にも、教育者として生きるヒントを与えてくれる一冊として活用できそうです。

『七つのわかれ道の秘密』 トンケ・ドラフト／作 岩波書店 2012年 C949/ト

オランダに伝わるかぞえ歌から秘密の作戦が始まります。小学校に勤めるフランス先生の創作物語が、ある日謎の手紙が届いて現実になります。手紙に導かれ、6つの通りしかない7つのわかれ道にたどり着いたフランス先生は、淑女なのに絶大な力を持っているロスマレインさんや、階段ばかりの屋敷、そこに閉じ込められている少年と閉じ込めている叔父など、見かけを裏切る不可思議な人や物に出会います。登場人物がひとくせもふたくせもあり、ちょっとひねった味わいがあります。



岡山県立図書館の事業について

秋になると、岡山県立図書館では遠足や学習の一環で見学に来られる方が多くなります。子どもたちが図書館に親しみながら、上手に利用できるように利用案内、施設見学を行っています。また、ご要望に応じて、絵本の読み聞かせ等おはなし会もしています。見学時間に応じて、次のようなプログラムを組み合わせることで過ごしていただいています。

～見学プログラム例～

- ・施設の説明(デジタル情報シアターで図書館についてのビデオを見ていただきます)
- ・バックヤード見学(普段見られない書庫を見ていただきます)
- ・ミニおはなし会(絵本の読み聞かせ、ストーリーテリング、エプロンシアターなどを行います)
- ・自由閲覧・本の貸出(子どもの部屋で好きな本を読んだり、気に入った本を借りたりします)

ここでは、見学でのミニおはなし会の一例をご紹介します。

①会の導入には、注目して雰囲気慣れてもらうため、比較的短いお話を読みます。



『どうぶつにふくをきせてはいけません』ジュディ・バレット/文 ロン・バレット/画 朔北社

「どうぶつにふくをきせてはいけません。なぜなら、やまあらしはとんでもないことになるし・・・」と、穴だらけの服を着たやまあらしが登場します。この後にも、服を着たいいろいろな動物が登場します。動物のおかしな姿に思わず子どもたちは大笑いです。

②おはなし会で本を選ぶ時には、季節の本を入れるようにしています。また、身近にある自然や科学を扱った絵本は、子どもにとって新しい発見の手助けにもなり得ます。



『びっくりまつぼっくり』多田 多恵子/ぶん 堀川 理万子/え 福音館書店

僕がまつぼっくりを見つけ、たねをとばしたり、おへそを見たりして遊びます。そして、柵の上に並べたまつぼっくりは、雨の降る日には小さくしぼんでしまいます。このように、まつぼっくりの性質が話の中で紹介されます。

③対象となる年齢を踏まえて、比較的長めの話を読みます。

『ハンダのびっくりプレゼント』

アイリーン・ブラウン/作 福本 友美子/訳 光村教育図書

ハンダは友だちのアケヨにあげるくだものを7つ頭の上のかごにのせて町まで歩きます。ところが、途中で動物たちが次々とくだものを盗み食べてしまいます。ついには、ハンダのかごはからっぽに。話を読み終わった後、どの動物が何を持って行ったかあてっこするのも楽しいですね。



『トラのじゅうたんになりたかったトラ』

ジェラルド・ローズ/文・絵 ふしみ みさを/訳 岩波書店

この本は絵と昔話風の物語がよくマッチして、読み手も読んでいてわくわくする1冊です。インドにやせこけたトラが住んでいました。夜、宮殿に行くと、王さまはみんなでおいしそうなごはんを食べています。そこで、トラはひらめいたのです。「じゅうたんに入れ替わろう」と。必死でじゅうたんのフリをしますが、そのトラの表情に釘付けになります。



図書館見学を検討されている方は、お問い合わせください。ご来館をお待ちしています。

児童サービス支援ボランティア研修会について

今年度、岡山県立図書館では、おはなし会の開催等児童サービス支援のボランティアに対してスキルアップ講座を全6回開講しています。

第1回(6月 8日) 最近の絵本の出版傾向を踏まえながら、絵本の選び方についての講座を行いました。
また、会の後半では、グループに分かれて事前に出されたテーマに沿って持ち寄った絵本を使って読み聞かせの実践をしていきました。

第2回(6月17日) 筒井悦子先生による講義「子どもとお話～お話を聞く楽しみ語る楽しみ」
(ストーリーテリング連続講座と共催)

第3回(10月18日) 参加者を県立図書館登録のボランティアに限定し、昨年度同時期(10月～3月)に定例ヨムヨムおはなし会で読まれた本について、テーマや時期に分類して紹介、解説していきました。

第4回(11月17日) 筒井悦子先生による講義「昔話について」 (ストーリーテリング連続講座と共催)

今年度、このボランティアスキルアップ講座は、後2回の開催を予定しています。参加者については、県内の図書館等で読み聞かせのボランティアをしている方も対象とし、県全体のボランティアスキルアップに資することができる講座となるように企画、実施しています。第5回および第6回の詳しい内容については、決まり次第ご案内いたします。参加については、県立図書館もしくはお近くの図書館を通じてお申し込みいただけます。興味がある方はお問い合わせください。

ストーリーテリング連続講座開催報告

平成24年6月16日、7月21日、8月19日、9月15日、10月20日、11月17日の全6回にわたるストーリーテリング連続講座中級編が終了しました。今年度の講座は、昨年度初級編を修了した方とストーリーテリングの経験がある方を対象に募集し、2回の講義と4回の実践を行いました。講師は、岡山市内で30年以上にわたって家庭文庫「草の実文庫」を主宰し、地域の小学校や図書館で読み聞かせやストーリーテリングの実践をしてこられた筒井悦子先生です。初回は「子どもとお話～お話を聞く楽しみ語る楽しみ」をテーマに、子どもたちにお話を語る意味や、面白さ、そしてボランティアの役割について講義していただきました。実践の4回は松岡享子さんの著書『お話を子どもに』をテキストにして学び、おはなし会の運営の仕方やプログラムの立て方について考えました。その後、受講生が1度ずつお話を語りました。同じお話を語ったことのある人からアドバイスがあったり、そのお話についての疑問を話し合ったりしました。最終回は講師の筒井先生による「昔話について」の講義をしていただきました。

実践を通して、語り手が聞き手の中にイメージを作り出していくことの難しさと、大切さを、感じました。イメージを作り出すには言葉選びがとても重要であり、語り手の中でお話の細部についてイメージができていないと、聞き手に喚起させることができないということが理解できました。また、お話を聞くことの面白さ、楽しさを再発見した受講生も多くいたようです。講座を通じて、筒井先生が常に「お話とは何だろう」「語るということはどういうことなのだろう」という問いを投げかけられたことを、受講生はこれからも考え続けていくことでしょう。

今後もストーリーテリングを続けたいという受講生に対して、現在活動しているボランティアグループを紹介しました。県内のさまざまな地域で活躍してくださることを期待しています。

児童図書研究室だより Vol.11

平成24年12月5日発行

お問い合わせ先

岡山県立図書館サービス第一課児童資料班

Tel : 086-224-1286 (代表) Fax : 086-224-1208